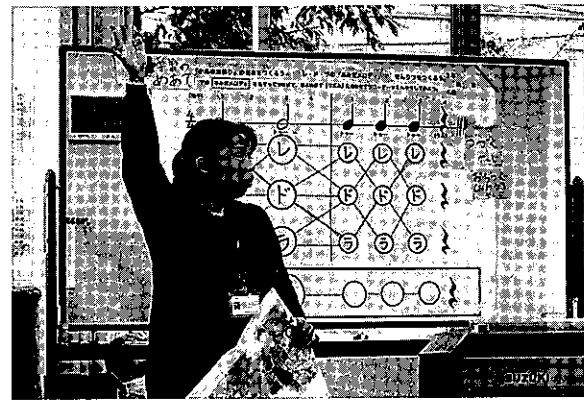




やあたたかい人柄、それらが音楽性につながってゆくことなどの感想が寄せられた。昨今、支援や配慮の必要な児童、多様な特性をもつ児童に対して、柔軟な配慮を行いながら授業をすすめてゆくことを再認識させられた。

いっぽう「課題」については、楽器の構え方や正しい運指について、さらに吹いていない時の楽器の扱い方などの指摘があげられた。これらの「課題」は、児童全員で確認する時間を設ける、個別指導で対処するなど、時間をかけてじっくりと段階を踏んで指導してゆく必要がある。いずれの学校でも、リコーダーを始める時期に突き当たる問題点である。

「成果」と「課題」とを授業者と参観者の双方が交互に立場を変え、多角的に思考しながら授業を振り返り、情報を可視化、さらに共有することで公開授業の価値が高められた。今回は「価値を見出す公開授業」の在り方を間違いないと問いただせる機会となり、大きな「成果」となったことを記憶に留めたい。

午後の研修は、「祭りの音を楽しむ」と題して、神楽師の倉谷仙太郎氏を講師に迎え、祭囃子の歴史や仕組みなどの講義を受けた。笛、大太鼓の各一名と締太鼓は二名に鉦の計五人を一組とするところから、五人囃子と呼ばれ、ひな段飾りの起源ともなっている。また正しい太鼓の奏法は、はたくものであり、たたいたり打ったりするものではないことを実際の音で確かめることもできた。口伝によって伝承されてきたお囃子をテキストや掲示物により、誰でもわかりやすく、楽しみながら祭りの世界へ飛び込めることができた。

後半では、笛の音色に合わせ、皆で代わるがわるに締太鼓を打ち鳴ら

した。昨今、遠い記憶となってしまう祭りの情緒を味わいながら、豊かな時間を体験できた午後であった。

学級経営部会

子ども・保護者・教師の
よりよい関係作りを目指して

江田 祥子(青山学院)

「先生の先生」として全国で活躍されている元東京都公立小学校指導教諭・現在はベネッセ教育総合研究所・教育イノベーションセンター研究員の庄子寛之氏による講演を実施した。明日から実践できることをたくさん学び、大変有意義な研修会になった。

「子どもに任せる学級経営とは」

庄子寛之氏

一 興味をもつ

日々の忙しさに追われていて目の前の子どもに興味を持てていないか。

この子は何が好きなのだろうか。

朝のうちに聞く。学校にきてくれ

てありがとうという気持ちをもつ。

二 感謝

教師と子どもは自然と上下の関係ができてしまう。興味を持った後は感謝を持ってにこにこ接する。

三 笑顔

先生の表情は大事。笑顔が標準装備になると良い。わざと厳しい態度をとることもあるが、笑顔でいたほうが良い。

四 環境

○自分がどういうクラスにしたいのか。

・教室環境は楽しい？

・授業おもしろグッズはある？

・授業中に笑いはある？

・安全な環境整っている？

・やっぱり子どもが楽しいことは大事。だが、放任になってはいけない。

五 目的を明確にする

○子どもに任せるのはあくまでも手段。なぜ任せるのか？

・一斉授業がいけないという幻想。

・ICTを使わなきゃいけないという幻想。

・クラスは仲良くないといけないという幻想。

・なんのために仲良くならないといけないのか。教員によって、子どもによって、保護者によってそれぞれ



質疑応答では、Native teacherの関わり、習熟度の差に対しての工夫、宿題についてなど様々な質問が出ました。外国語教育は学校により、時数や教科書、カリキュラムなど様々であるため、貴重な情報をいただく機会となりました。

午後は、神戸市外国語大学横田玲子先生に、「慣れ親しみのその先へ」というテーマでご講演いただきました。ご講演では、①実践例 ②文科省が求めていることについての解説 ③実際の授業でどのように教材を使用していくべきか、という三つの構成でお話しいただきました。横田先生が以前、海外の日本人学校や私立小学校で、実践されていた内容を写真を使いながら共有いただいたことは参加の先生方にとって明日への授業の参考となり、とても興味深かったです。また、本物のコミュニケーションとして、安全性が確保された大学構内で交換留学生との交流など、私立ならではの附属の大学との関わりを活用していくと良いという横田先生の提案は参加者の先生方の関心をひいていました。

参加者からは、「横田先生の『教科書の中に子どもを閉じ込めない・教

室内に英語を閉じ込めない」ということばが強く印象に残りました。子ども達が英語を使用する目的・場面・状況を常に考える大切さを再確認しました」など感想をいただきました。

最後のグループ活動では、横田先生からテーマをいくつかいただき、先生方の興味に合わせて意見・情報交換が行われました。充実した研修会のために、多大な時間を割いてご準備いただいた明星小学校の先生、ご講演いただいた横田先生には改めて感謝をいたします。

音楽部会

音楽を通してのふれあいと学び
輝ける未来へつなぐために

室伏 唯史(学習院)

今年度の音楽部会の研究テーマは「音楽を通してのふれあいと学び輝ける未来へつなぐために」と題し研修会の日を迎えた。

当日は、久々に再開できた部会の先生方と挨拶を交わすなか、公開授

業の時間となった。明星小学校の菊地有佳里教諭による「レドラの音で旋律をつくらう」と題して、三年生の授業を参観した。「レドラ」の三音列の運指は、学習を始めた児童にとつて、最初の基本となる運指である。

本時の取り組みは、物語「小鳥のお祭り」のお話の合間に、提示された「あみだメロデー」と称した四拍子二小節のリズムに、三音列を即興につないで演奏する活動である。教師が語る物語の合間に、一人ずつ「あみだメロデー」を奏でる。始めたばかりのリコーダーを幼い手でしっかりと構え、教師の語り口に真剣な眼差しで応えようとする姿に、参観者の誰もが、声援の拍手を送りたい気持ちを共感したのでないかと思う。

協議会は「あみだメロデー」の終止感に議論がなされた。最後に本時の授業を「成果」と「課題」の二点に絞り、付箋紙に感想を記入してボードに貼って閉会とした。

「成果」としては「前向きな言葉がけにより、児童が安心して授業に参加できていた」「児童の発言やつぶやきに丁寧に応え展開につながられた」という内容が複数あげられ、菊地教諭の児童に対する細やかな配慮